

1、「花の日・こどもの日」というのは教会暦のなかにはありませんが、6月の第二日曜に日本のプロテスタント教会が任意に守ってる行事です。起源には諸説がありますが、19世紀米国マサチューセッツ州の会衆派の教会で献児式に花を飾って礼拝したことによると言われています。日本へは大正初期にとりいれられたようです。花を持ち寄り飾って礼拝し、礼拝後は日頃お世話になっている近所の公共施設や、病院などをこどもと一緒に訪問する習わしです。子どもが礼拝の主役の行事として大切にされてきました。

2、花は端的に「神の創造の業」を現し、その「恵み」を示しています。イエスは「野の花を見よ」といって、花に象徴される「神のみそなわし（神の支配）と神からの関わり（神の義）」とを「何よりもまず」求めること強く説きました。人生の苦労は多いだろうけども、「思い悩むな」と、とめどもない人間の思い悩みに終止符を打つことを命じました。そして、「明日のことまでも思い悩むな、明日のことは明日自らが思い悩む、その日の苦労はその日だけで十分である」と、人を自由の主体へと呼び覚ました。これが「山上の説教」の中の「思い悩むな」との有名な説教です。

3、「野の花を見よ」とイエスが言っているのは、花を観察せよということとは違いません。観察は知識のために、理科の時間にすることです。花が秘めている神秘への驚きを抱け、ということではないでしょうか。レイチェル・カーソン（1907-1964、米、水産生物学者「沈黙の春」著者）は、子どもは「センス・オブ・ワンダー（神秘さや不思議さに目を見はる感性）」を持っている。それは、人間を超えた存在を認識し、おそれ、驚愕する感性であるといっています。子どもと一緒にそれを再発見することの大事さを訴えています。私は、青年前期を農村で育ったので、自然への感性を随分養われました。自然の中に驚きをもって神を覚えることは素朴な信仰でした。神学校にいて神学を勉強すると、自然の中の「神体験」は自然神学といってキリスト教の正統神学ではない、と言われました。イエス・キリストによる歴史的啓示以外に神の啓示はない。そのキリスト論的集中こそが神理解において大事である、と教育されました。イエスという「顔」を持った神が聖書の神です。確かに、今でも、たとえ、イエスをキリスト論の枠内におかないでも、イエスを他にして自分の実存はないと思っています。そのイエスが「野の花を見よ」と言っておられるとき、そこには「センス・オブ・ワンダー」への指示があったのだと思います。「野の花を見よ」という言葉が、花との出会いの体験を比喩として歴史的啓示を思い起こさせる契機であると、その重さを感じています。

4、今日壇上に飾られている花は、個性もあり華やかでもあります。でも、「野の」と言われているように、ありふれた花、どくだみ、タンポポ、野菊、露草の一輪に、神の創造の業を感じないでしょうか。また、花っ気を全く失った、戦場のパレスチナやシリアの民衆の生活を想像し、花は平和の象徴でもあると思いました。「野の花をみよ」。ここからの想像力を膨らませてこの季節を生き抜いて行きたいと存じます。